



研究奨励事業  
研究報告

初期清張の学習（—短編小説構築の方法—）

山口 政幸

北九州市立  
松本清張記念館

## 初期清張の学習 —短編小説構築の方法—

山口 政幸

### 一、「西郷札」入選す

松本清張のデビューは鮮烈だった。全く無名の四十才を越えたズブの素人である人物が書いた「西郷札」という小説は、昭和二十五年十二月に発表される

週刊朝日の「百万人の小説」という懸賞小説コンクールで、三等の入選を果たす。当時松本は、北九州小倉にある朝日新聞西部本社（九州地区を朝日ではこう呼んでいた）の広告部意匠係として働いていた。一等になった深安地平とい

う人の「青春の旅」という作品は、敗戦後の呉軍港を舞台にした男女のすれ違う恋愛が描かれたものだが、この作品自体も、深安という人物自体も文学作品や文学者として今に伝わることはなかった。「青春の旅」は、選評によれば、

おだやかな文体と素直な流露感が評価されたようだ。その一方、〈お正月の床の間に飾られる形のとゝのつた生花の松竹梅〉のような作品とも評されており、あらゆる意味で、「西郷札」とは対照的な作風である。なお、深安は、これより以前、同じく週刊朝日の主催した「第二回記録文学」に、同様のモチーフである「軍艦解体」で、同じく一等入選を果たしていた。今回の受賞の著者紹介でも、はつきりと〈二度目の入選〉であることが、謳われていた。「青春の旅」は、入選決定の記事に続く、昭和二十六年新年特別号に掲載されることになる。

今、この「週刊朝日」主催の「百万人の小説」というコンクールを考えると、まずは特徴として挙げられるのが、職業作家による選定という制度を設けていい、という点だ。筆者が当時部員としてこの選出にあたっていた宇野博氏にお話をうかがったところ<sup>①</sup>、この応募総数一〇〇〇点近い数の作品を、予選段階を通過するあたりからは、四人ほどのスタッフで消化していくようである。具体的にその名を挙げれば、編集長が宮田新八郎、副編集長がのちに児童文学の方面でも活躍する高山毅、そして部員として先の宇野氏以外にもう一人、福田清之という人物がいた。宇野氏の言によると、この福田が、「西郷札」を下読みのときから「いい作品だ」と強く推していたとのことである。

さて、清張自身、この「西郷札」の三等入選をどのように考えていたのか。しばしば引用される一文であるが、「週刊朝日」五十周年記念号（昭和四十六年四月五日）に寄せた「『西郷札』のころ」の中で、次のように当時のことを清張は振り返っている。

三等ながら「西郷札」は春季特別号というのに掲載された。雑誌に載つたのはほかに特選の作品だけであつた。岩田専太郎氏の挿絵で、さすがに朝日で、大家の画家にたのんでくれるものだなど感激した。おかげで作品は引立ち、予想以上に読まれたようである。（中略）

それにしても、あのとき「西郷札」が入選しなかつたら、いや、入選しても雑誌で活字にならなかつたら、わたしは小説をつづけて書いていくようなことはしなかつたであろう。（傍点山口）

三等の入選を果たした上で、活字化された僕倆を素直に語っているわけだが、ここには清張自身が気づいていない、ささやかな事実誤認がある。言うまでもなくここで彼の言っている〈特選の作品〉とは、先の「青春の旅」を指しており、これが昭和二十六年新年特別号に掲載されたのは、先に述べたとおりであ

る。そして清張の「西郷札」だが、これはその三ヶ月後の昭和二十六年三月十五日発行の春季特別号に全文が掲載された。

従つてあたかも「西郷札」が、一等である「青春の旅」と同じような価値づけをなされて、活字化されたのだという清張の思い込みは、事実を故意に歪めた結果からそのように考えられたものではない。一等の深安が載り、その後で自分の作品が載ったわけで、おそらくそれ以後の週刊朝日を清張は見なかつたか、見たとしても関心をそそられることはなかつたものと考えられる。

しかし清張が言つている（三等ながら）の言いまわしは、事実誤認の上に成り立つてゐる。清張以外の作品の一等のものも、三等のものも、実はこの後の週刊朝日に掲載されていたのだ。

一つは五味川淳の「家族裁判」、もう一つは南条道之介の「出べそ物語」である。五味は優賞、即ち一等であり、南条は入選であつて、「西郷札」と等しい。これらはいずれもユーモア小説特集と題されて、「西郷札」に遅れること三ヶ月後の、昭和二十六年六月十日発行の週刊朝日夏季増刊号に同時に掲載されているのである。

このことは、もともと主催者である週刊朝日側の意志に他ならなかつた。深安の特選を告げる昭和二十五年十二月二十四日号の週刊朝日の記事は、次のように始められてゐるのである。

本誌で募集しました「百万人の小説」は、十二月十日号で発表の予選合格三十篇について慎重に審査の結果、こゝに下記の六篇を入選と決定、それ／＼賞金をお贈りすることになりました。うち特選の現代小説「青春の旅」は本誌新年合併号に発表、他は本誌増刊号に掲載の予定であります。御期待下さい。（傍点山口）

ユーモア小説「出べそ物語」 南条道之介

現代小説「死ねない男」 埼輪史郎

このうち、筆者が調べたところ、森富子の優賞作「桜土堤」と、埼輪史郎の入選作「死ねない男」に関しては、週刊朝日での誌上掲載が認められなかつた。この理由が、はつきりしない。もともと受賞に値しないような作品ならば、朝日の側でわざわざ選ぶとは思えないのだが、選んでおいたものを載せないとるのは、分量上の事柄などが影響していたのだろうか。いずれにせよ、この点判然としないのである。

この企画のもう一つの特徴として挙げられるのが、所謂職業作家による参加も自由であった、という点だ。入選を知らせる選評の中に、(文壇的に名のある)作家の応募作品も遂に選外に落ちた」とある。これは最終的に絞り込んだ六作品の質の高さを強調する文脈で言われていることだが、職業作家を選出者に加えなかつたという方針も、その情実がらみの採択を防ぐためだつたかもしない。

もう一つ興味深いのは、選ばれた六篇それぞれに、現代小説・時代小説・ユーモア小説というジャンル分けが施されていることである。これはすでに予選通過の段階でも付されていた。予選での評では、時代小説に優秀なものが多いと言わながら、六篇中選ばれたのは「西郷札」と「桜土堤」であり、後者が掲載された様子が認められないのは、前に述べたとおりである。

結果的に、選ばれた六篇は、現代小説二篇、時代小説一篇、ユーモア小説二篇と、きれいに区分けされたような状態になつた。しかし、これは単なる(偶然)である、と審査報告は伝えている<sup>⑩</sup>。当初から週刊朝日の側に、掲載の予定はあつたわけだから、或いはこの(偶然)も、のちのちをある程度睨んだ配

慮が加えられていたのかもしれない。いずれにせよ、選ばれた作品は、等級においてではなく、作品ジャンルとして類別化され、掲載されることになつた。松本清張という、ただ単に一つの懸賞小説の三等をとつたのにすぎない人物が、作家へと急激に変貌していくのは、この週刊朝日が偶然行つたジャンル分けによる入選作の掲載という事態が存外に大きな意味を持つた、と考えられるのである。単なる小遣かせぎに過ぎない動機しか持ち合させなかつた人間が、なぜ真剣に小説を書こうと志していったのか。また、それを可能にしたものは何か。

## 二、週刊朝日のしたこと

清張の「西郷札」が載つた春季特別号の目次を見てみよう。

清張の「西郷札」  
画学生・旅に出る  
桐の花咲く家

堀田右衛門

西郷札

新・平家物語を中心に対談

長谷川如是閑

吉川英治

長谷川伸

戦前からのキャリアを持ついわゆる大衆小説作家たちの中に、ほつんと一人だけ「西郷札」、松本清張の名が見える。これより五年を経過すると、この無名の新人は、すでにこの時点で週刊朝日の看板となりつつあつた吉川英治の「新・平家物語」にあつさりと追いついてしまう活躍をし出すわけだが<sup>⑪</sup>、無論この時点でそれを予想できた者は一人もいない。清張自身、こうした新人が

常に感じるであろうように、自らの小説を生み出す技量についてばかりかねる思いがあつただろう。事実彼は「朝日文芸入選作」として載せられている「西郷札」の本文に割り込むようにしてつくられている囲み記事の中で、次のように「感想」をもらしていた。

文学的には何も勉強してきていない。十枚の短編すら書いたことがない。

先輩、友人なくこの方面では孤独。この弱さはこの「西郷札」にも表われて、構成や文章の拙劣をどうすることも出来なかつた。(中略) 初めの構想と出来上がつた結末とが、断層のようにズレたのは不慣れのかなしさである。不満はあれもこれもと際限がない。

のちに清張がくり返す文壇的な孤立感というものがこの頃より色濃く表されているのが興味深いが、実際四十才を越した中年男に対して親切にその文学的才能の有無を説いてくれるようなありがたい存在などあるはずもなかつた。

そこで、清張は、大胆な行動をとる。よく知られていることだが、大佛次郎、木々高太郎、長谷川伸など既成作家に対し、自らの「西郷札」の掲載された週刊朝日を送りつけるという行動をとつたのだ。これは一つには、先に見たとおり、彼の中で文学的知己を得たいとする心の表れだつたに違ひないが、單に文学的知己を得られればそれでよいというのではなく、あわよくば、作家として身を立てる事が可能かどうかということにまで言い及ぶような見解を、彼は心底求めたことだろう。逆に言えば、それには彼の中で、少なくともここに掲載されている既成作家に伍していくことの心の準備のようなものが必要となる。實際、「西郷札」とともに並べられている「画学生・旅に出る」、「桐の花咲く家」、「塙田右衛門」、「眼の中の女」を比べると、その著名な作者の名前のわりに、力の抜けたような作品が多いのに驚かされる。おそらく

くここでの書き手たちは、時代小説というものに対する当時の読者が最大公約数的に抱くイメージに合わせた作品を常に書けるという点では、練達と呼べるような作家たちだったのだろう。清張の「西郷札」は偶然のことながら、「時代小説」という枠組みの中に据えられてしまつたことによって、他ならぬ書き手である清張によって、その未知なる可能性と価値とが再発見されていくというような経緯をたどつたと考えられる。この号の週刊朝日は「春季増刊」の号で、特集として「傑作時代小説 ニュース・ストーリー」の二本立てとなつて、表紙には、村上元三の「佐々木小次郎」の絵姿が、同小説の挿画家である木下二介の手によって描かれていた。先の井伏以下の小説はないのは、いわば村上の「佐々木小次郎」が有した内なる挫折性とでも呼ぶべき戦後的な何かだつたろう。「西郷札」が他の時代小説の「傑作」と身を分かつのも、おそらくこの「佐々木小次郎」に近いような情合いの表れかもしれないが、この「春季増刊」に幸か不幸か村上元三の執筆はなかつた。清張としては、送りやすい状況が期せずして生まれていた、というべきだろう。

大佛と木々から程なく送られて来た返事が残されている。これは清張自身が「西郷札」や「或る『小倉日記』伝」にまつわる一連の記事群をまとめておいたアルバムに收められており、現在松本清張記念館の所蔵となつていて、同館が発行した図録「ふるさと小倉 清張文学の羽搏き」(一九九八年十二月二十一日)の中でその一部分を読むことができる。大佛は、「西郷札」について、次のようなコメントを加えていた。

西郷札面白く読みました 懸賞小説の選も時々やらされるので知つていますがこれだけのものはなかなか見当たらぬものです 御精進を祈ります

のではないかと言ふことです　記録体の文章で終わつたせいで詩をのがしたもので余韻が残らぬ点です　作者はこゝへ来て不意に戸を閉めて了つたとでも言うのでしようか　高い読者にはこれでいゝでしようが終止符のあとに何か舌の上に残るものつゝと思ひます

「西郷札」を水準以上と讀えながら、実作者の立場から、というよりあくまで作品を読む読者を視野に入れた觀点から、「西郷札」の結末部に対して、一つの教示を与えていたのが印象深い。小説というものを書き出した無名の新人に対して、少しく技術的すぎないかという疑問も湧いてくるが、これは大佛という作家がこの無名の作家に対して、早くも自分を後繼するかのような力量を感じし、その上であえて「高い読者」でない読み手というものを想起しているのだと、好意的に受けとめておこう。それとともに、やはり週刊朝日が無意識に果たした役割というのも考慮すべきだろう。つまり、こうした「傑作時代小説」と銘打たれたジャンルの中では、大佛もこの新人をそうした枠組みの中で捉えてしまったという意味である。先に述べた五味川や南条らは、「ユーモア小説」という枠組みが与えられていた。そのため、彼らの作品は、「傑作ユーモア小説」特集という夏季増刊号に組み込まれ、デビューしたての源氏鶏太<sup>⑤</sup>などと並べられることになった。編集する週刊朝日の部員としては極めて自然な発想によるまとめ方に違いないが、まとめられた新人の意識、ならびに、それを自己の作と隣り合わせに読むことになる既成作家の意識のうちでは、このアレンジは存外深い認識の規定として機能するのではないか。即ちユーモア小說ならユーモア小說としてこれらの作品が認められたというそのことが、再び自らをユーモア小說を作る作り手として自己規定の意識を促し、また初めてそれを見る読み手としては、ひとまず作品をユーモア小說の規格に基づいて判断

せざるを得ないという点である。先に見た大佛の清張に対する見方は、これが何も「時代小説」というものをもともと視野に入れた、言い換れば「高い読者」や「低い読者」というものをあらかじめ想定した書き手による作品なのでないという認識を前提として持つていない。それこそ、週刊朝日という見えざる権威が、大佛のようなベテラン作家にすらその無意識のレベルで働きかけるを得なかつた内実の姿であった、ということができるだろう。たとえ大佛の表面的な反応として、自らのすぐ隣に掲載されていた無名の作品に対して、気軽に反応したにすぎないということであつたとしても。

### 三、「結末」へのアプローチ

「西郷札」という小説の〈結びの部分〉とは、次のように描かれたものであつた。

図書館で新聞記事を捜している間にふとこんなことが目についた。

「日向通信（明治十二年十二月輿論新誌）薩賀の製造せし紙幣に特別の訳を以て政府に於て御引換可相成貞道路の風説」

私はこの二行ばかりの記事の間に、顔色を変えて西郷札の買占めに狂奔している二人の人間が目に浮かぶのであった。

先に引いた清張自身の言によれば、これは〈初めの構想〉と〈出来上がつた結末〉とが齟齬をきたしており、〈断層のよにズレた〉状態である、ということになる。〈初めの構想〉というのが不明のため、どのようにそこに〈ズレ〉ができているのか推測しがたいが、石川巧はそれを〈テクストの終わりに何らかの空所を用意し、それを読者の想像や判断に委ねようとする意識〉とまとめ

てゐる<sup>⑤</sup>。石川が指摘している具体的箇所は、雄吾が書き残した手記の記載が破られていることの謎を指しているが、先に引用した結末部においても、ある曖昧さをより濃くしてしまった結果を招いている。雄吾が自らを陥れた義弟である塚村に対して何らかの暴力的制裁に向かい、その随伴として季乃にまで悲劇的な結果が及んだような流れを受けた形で、先の〈私〉の記述がつづくことになるのだが、ここで〈買占めに狂奔している二人の人間〉とは、具体的には宮崎における雄吾と糸太郎を指しており、時間的には、一葉の新聞紙を取り出して、〈余〉に卯三郎が事の真相を知らせる以前の時間に他ならない。〈狂奔〉する姿はたしかに二人の尋常でない心の状態を鮮やかに映し出しているが、この中に起きた「悲劇」の質の甚だしさに比べると、その心的密度の程度から言つても、稀薄な部類にむしろ属してしまう。総じてここでは、小説読者の読みの時間軸が不必要にズラされており、新聞記事という資料の事実性の強調によつて、小説が停止してしまっているのだ。

大佛が衝いたのは、そうしたことだった。おそらくそれは彼が認識する「読者」の層と乖離してしまうことになりかねない。読者は貪欲に、小説中の人物たちの生き様に反応して、そこに「詩」を求めていくのだから、少なくとも「時代小説」の「傑作」と呼ばれるものを書こうとする場合、読者に対し不意に門戸を閉めるような真似をしてはならない。まして作家が自在に操作し得る一級資料のようなものを持ち出してそれを行なうことは、大佛のように本来そうした力量の備わった作家が慎重に避けてきたやり方でもあった。いわばそれは、作家としての生活の知恵のようなものと言つてよいだろう。

偶然のことながら、「西郷札」と併載してしまった大佛の小説、「桐の花咲く家」を例にして、そのあたりを見てみよう。これは滝善四郎という浪人が、自

分を敵と狙う男のためにすすんで討たれてやろうと相手を待つてゐる話である。

善四郎の大家にあたる店に賊が押し入つた。善四郎は參貼りをして一人でおとなしく暮らしていたが、捨てもおけずに、大家一家を難から救つた。ところが、加勢に加わるはずだった町道場の者らが、手柄を横取りにされた怨みから、善四郎を挑発しようとする。道場主の男は、しかし、善四郎の力量を正しく見抜いて、ひとかどの人物として遇していく。やがてこの男を自分の末娘の婿にと願うのだが、善四郎は自ら敵を持っていることを打ち明け、その話を断る。朋輩をやむなく手にかける羽目に陥つた善四郎は、その遺児の成長とともに討たれてやろうと、ひそかに江戸で待ちつづけていたのだ。題名の「桐の花咲く家」とは、桐畠の中にある善四郎の一軒家を指しており、彼の気品の恬淡さを表している。そうしたところへ、ある日、急な知らせが届く。故郷の信州にいた敵の遺児が亡くなつてしまつたのだ。善四郎は故郷に向かう。菩提寺の心やすい和尚から、滝善四郎などはもはやおらず、江戸での穏やかな生活をつづけるがよいと説かれるのだが、善四郎を咎とする上意の者たちに追われることになり、善四郎はその場を逃げる。善四郎は、遺児の母親になら喜んで討たれもしよが、上意で召し捕ろうとする者には必死の抵抗を覚悟した。が、そのとき、逃げまわる彼の目の前に、ある光景が広がり、善四郎は翻然と別な決意をする。やや長い引用になるが、その箇所を引こう。

段丘を昇つて、平たく麦の畠がひろがつたところに出た。そこは、春の月が明るくて、躯をさらしていることに成る。掘立小屋同然の、小さい百姓があるのを見て、その蔭の、粗朶を積んであるところに隠れた。

小さい窓があいていて、屋内に話声がしてゐた。まだ、人が起きていたのだと用心しながら、立つと、暗がりだったが、何か花が甘く匂つてゐる

ように思われた。

「さあ、早く寝なよ。」

と、母親らしく子供に言い聞かせている声が、はつきりと滝に聞こえて来た。

「よく寝て起きると、また、あしたも好い日が来るよ。」

あしたも、また好い日が。——滝は自分でも、口の中でこう呟いていた。夢を見ているようであった。日の前に月明りに浴して大きな木が立つてゐると思い、拡がっている枝を見ると、見慣れている桐の花が一面に見えた。滝は、思わず胸をときめかせた。

崖下にある自分が住みなれた古い家のことを思い、そこへ帰つて、傘を貼ることを、ふいと、抵抗出来ない欲望として、胸のずっと奥深くから、感じて來ていた。

桐の花は、明るい月にいよいよ匂つていた。

善四郎という、いわば大佛好みの（あるいは正確には大佛読者好みの）人物造型もさることながら、一篇の短編小説としての比重のかかり方は、この結末部分の巧みさに表れていよい。冒頭で、善四郎のわび住まいが語られるとき、紙傘の上に散つていたほの明るい桐の花の様子がさりげなく差し挿まれていたが、その情景描写がここにおいてはじめてぐっと生きてくるのである。しかもそれは単なる同一の風景の確認という働きばかりでなく、外在化された心象のメタファーにもなつていて。この場合、言うまでもなくそれは母親の台詞に込められた「あしたも好い日が来るよ」という幸福への願いと現在の貧しき幸福だろうが、ここで桐の花を伝便の鈴に置き換える、その幸福への期待感というものを裏返せば、そのまま「或る『小倉日記』伝」の結末の世界が現出する

のではないだろうか。少なくともそれは、昭和二十五年、即ち「西郷札」を書き上げたときの清張にはなかつた、一つの技法であつたに違いない。技法と、そう言つてしまえばことは簡単なようだが、小説というものを書き始めた者にとって、こういつた細部と細部のまとまりの付け方や、一篇の比重の置き方などは、おそらく技巧というより、小説を構築する際の世界観そのものを作り上げていく作業に他ならない。「西郷札」を書いたのち、清張が注文を受けて書いた作品は、福岡県警機関誌「暁鐘」（昭和二十六年十月号）に載せた「陽炎」と、講談社の分社としてあつた世界社の雑誌「富士」（昭和二十六年十二月号）に載せた「くるま宿」だが、両者とも、この「桐の花咲く家」の通俗性を二分化して作り出したような作品になつていて、「陽炎」は、女敵討ちという特異なテーマを扱つたと言われているが、結局のところその女のうらぶれた生活の様子を垣い間見て敵討ちを断念する話だし、また「くるま宿」の方は、セシル・サカイが『日本の大衆文学』（1997年2月19日、平凡社）の中で要約した、人は見かけによらないものだというヒーロータイプをそのまま踏襲したかのような伝統的の人物造型で、滝善四郎の奥床しい、隠された剣の腕前が暴かれていくのと通じ合う。犬村彦次郎は、清張の出発期からの描き分けの才能について言及しているが<sup>6</sup>、この昭和二十六年に書き上げられた二作品を、遠く支えていたのは、大佛の指導による大衆時代小説への開示と、そのドラマトウルギーの受容と実践だったわけだが、読者の舌の上に余韻として残る「詩」を作り出すのには、更なる学習が必要とされたのである。

四、再び「結末」へのアプローチ——あるいは「事実」をめぐる冒険

「西郷札」は、一種の歴史小説としての色彩を放っている。それは森鷗外の「歴史離れと歴史其儘」以来我国の歴史小説と呼ばれるジャンルに刻印されづけ考えられている、事實性の裏づけ、という印象からだ。簡単に言えば、「西郷札」という作品には、フィクションを超える資料的時間が刻まれている。「東京曙新聞」や「大阪日報」など明治十年代の大新聞小新聞などがそれだが、冒頭に顯示される「富山房版」の百科辞典という存在も、この物語を支えるのに大きな役割を担っていた。辞典を読んだ（私）以下新聞社の部員たちは次のように感じる。

これで疑問は解決した。これは薩軍の軍票のことである。おそらくこの出品者の父祖もこの不換紙幣をかかえて「多大の損害を蒙つた」一人なのであろう。その子か孫かが家に残っていたものを出そうというのである。

西郷、ふだと読んだ連中は笑いだした。

〈西郷、ふだと読んだ連中は笑いだした〉とあるが、言うまでもなくこれは送られてきた「西郷札」なるものが何ものかわからず、調査部の百科辞典によつて、正しい認識がえられたことからくる（笑い）に他ならない。「西郷札」は西郷「さつ」であつて、西郷「ふだ」ではない。冒頭部分に置かれたこのささやかなエピソードのもたらす意義は存外に大きい。以後この小説を読み進める者にとって、「西郷札」という本来漢字表記の上ではアンビギュアスな二重性を帯びた言辞は、「さつ」と一義化されるのを余儀なくされる。そして、それ以上に重要なのは、こうしたことがいちいち歴史的事実に符合する正しい認識なのだという意識が潜在化されることだ。（私）の読み解く『樋村雄吾伝』なるものがたとえどのように虚構化された產物であつても、西南戦争や西郷隆盛や薩軍の存在が事実であったように、「西郷札」自体は西郷「さつ」として実

在したものである。この事實性のギリギリの認識の下に、いわば虛構の人物である雄吾や季乃、塙村圭太郎などが接続されている。普通こうした小説の場合、例えばもっと中心的人物、桐野利秋や具体的な明治高官の隣りに、かの人物たちを位置づけるのが常道だろうが、そうした時代小説にありがちな安易なキャスティングのあり方を避け、雄吾の「覚書」と新聞という歴史資料の角逐の相において一篇を構成したところに、松本清張という無名の男の計り知れない独創があります。私的でしかない雄吾伝の覚書は、西南戦争中後の明治十年の動きを追う新聞紙の言説が、巷間のエピソードを忠実に言説化していくほど、逆にどのように蔽うても蔽いきれるはずもない言説の陷阱を逆照するかのように、現実とはややズレたところにある実在する存在として自らを主張するのに成功するだろう。従つてここでの記事の引用は、原則的に正確でなければ意味がない。

事実、正確なのである。のちに清張はこれが『新聞集成 明治編年史』（財政経済会 昭和九年十二月十日）に掲ることを明らかにするが<sup>⑧</sup>、その第三巻にあたる「西薩擾乱期」から記事はことごとく採られている。

が、しかし、ただ一つだけ例外がある。先述した、この小説の棹尾の部分にあたる「輿論新誌」の記事である。それは、次のようになつていた。

「日向通信（明治十二年十二月輿論新誌）薩賊の製造せし紙幣に特別の証を以て政府に於て御引換可相成旨道路の風説」

先の『新聞集成』の第三巻三三五ページに、この記事は載せられているのだが、年月日が異なつている。『集成』によれば、それは、明治十年十一月二日の「輿論新誌」が正しい。また、〈日向通信〉という見出しもそこにはない。

「西郷札」上の明治十二年という年時は、この物語内時間の進行の幅を伝え

てはいる。早い話、事実としての明治十年十一月一日では、雄吾たちの物語が間に合わないのだ。

しかしそれならば、わざわざ最後に「輿論新誌」を出さなくともよかつたのではないか。なにも、年月日をいじつてまでも、そこに事実としての明治新聞紙を登場させる必要はあつたのか。

先にも言つたとおり、この部分は、「西郷札」という小説の時間軸の進行をズラせておる。東京に戻った雄吾のとる『最後の策』の不明化が小説「西郷札」の終了地点だとすると、この一行ばかりの記事の間に浮かぶ、狂奔する二人の様子とは、宮崎における雄吾と桑太郎に違ひないからである。

どうして、「輿論新誌」の年月日が明治十二年にされたのか、もはや明らかだろう。〈私〉が担うべき資料によるこの歴史的に正しい裏づけがあるとする物語進行の時間の刻みが、雄吾伝が内包する雄吾を軸とした物語 자체に備えられた内在化の時間によつて、浸食されたためである。この歪みの極点に立つて、〈私〉は眼前に光景化された二人の様子を思い浮かべようとする。こうして、あたかも〈特別な訳〉を信じた歴史上の一人物として、雄吾たちの物語は「事実」に限りなく相即していくことが、〈私〉によつて再確認されていくことになる。少なくとも「週刊朝日」に入賞した他の小説には、これほど手の込んだ、ある意味で不埒とも言える作為を施した作品は見当たらない。

しかし、ここでの清張は、いまだに迷いのうちにあるとも言える。おそらくこれを書いたときの彼の意識としては、先述の作品掲載時における履歴において披露しているように、せいぜい芥川龍之介の「開化の良人」などに代表される作品を読んで、〈明治の初期に覗き絵のような幼い憧憬とロマンを感じた〉程度だつたろう。

清張は、芥川や大佛次郎などとは違つて、ある明確な方法を駆使して、より自らの小説に対して確信犯的になつていく。言つまでもなく、それは、「取材」するという行為においてなされた事象だつた。

## 五、三たび「結末」について——清張小説の完成——

「西郷札」において、その名称の正確な呼び方が、作品の主題性と響き合つていたように、「或る『小倉日記』伝」という作品にも、ある一つの名称をめぐつて興味深い事実が浮かび上がつてくる。

それは、主人公の「田上耕作」という名前についてだ。この作品ははじめ「三田文学」に掲載された<sup>⑤</sup>。「西郷札」を送つたのをきつかけとした、当時の「三田文学」の編集をしていた木々高太郎の好意によるものだが、そこでの主人公の名称は、「上田啓作」となつていた。

すでに半ば常識化していることだが、田上耕作という、いま我々が普通に目にすることができる「或る『小倉日記』伝」の主人公の名称は、実在した人物の名前である。戦前の小倉に在住した人物で、小説に書かれているとおり肢体不自由者であった。「たがみ」ではなく、「たのうえ」と発音する。

「田上耕作」を、「たがみ」ではなく、「たのうえ」と正確に発音しようとすら者は、この小説が実在した人物の上に築かれた小説であるために、その主人公の名称も実在のそれで読むのが正しいのだ、という判断を思わず下すのである。事実この小説を音読する必要が生じてくると、筆者なども「田上」を「たがみ」ではなく、「たのうえ」と呼んでしまう場合が普通となつてしまつてい

しかし、この作品には、先の「西郷札」の冒頭部に描かれたような、正しい読み方を喚起する指示は一つもなされていない。つまり読者は「田上」を「たがみ」と呼んでも、「たのうえ」呼んでも、差しつかえないわけだが、なぜわざわざ「上田啓作」から「田上耕作」という実名への書き換えを施しながら、清張は「たのうえ」という一見名字としては呼びにくい名前について、「西郷札」のときのような、読み方の正確な指図を施さなかつたのだろうか。

その前に、この「田上耕作」という存在を掘り出したことの功労について、触れておきたい。無論この小説が発表された昭和二十八年当時、小倉を中心とした地域において、「田上耕作」の名前はそれいかがわった人々の記憶のうち



豊国学園同窓会誌「豊友」(第4号)

に有していた。だからちょうど我々がついこの間亡くなつた故人の実名が、その生涯の様子とともに、小説化されしまつたような居心地の悪さを、田上耕作の周辺の人々（特にその肉親の方々）が感じたのも無理はない。耕作を最後に引きとつた耕作の伯母にあたる婦人は、清張の取材を一度受けたのち、それが小説化されたのを知ると、二度と清張に会うことはなかつた、と聞いている。

そういうた耕作の近親の方に取材した論文は、一人の女子大学生によって、書かれた。森田雅子という当時日本大学の四年生が書いた卒業論文がそれだが、森田自身それを豊国学園同窓会誌「豊友」(第4号)に、昭和五十五年十月に書き、活字化した。豊国学園とは、耕作が通つていた旧制の私立中学で、現在も北九州市門司区柳町に男女共学の高等学校として残つてゐる。いわば母校の隠れた著名人を堀り起こした東京の大学生に、学校側が校友誌上で短い記事を書いて貰つた、というわけだが、森田の大学での指導教員であった岩城之徳が「國文學」誌上にそれを取り上げたのが、国文学レベルで「田上耕作」という存在が確認された端緒と言つてよいだろう。(昭和五十八年九月「國文學」学燈社 64ページ)ここでは、森田の記事に載せられていて耕作の写真が、そのまま使われてゐる。森鷗外居住の趾の碑の横に立つ、着流し姿の田上耕作は、首を傾げ、左手にステッキを持つて、一人で立つてゐる。そのやや自然ではない全体のこわばりのようなものが、彼の不自由な体からくるもののようにも受けとられる。森田は事実として調べ上げた耕作の家系、学歴、また活字化された彼の文章など幅広く紹介しているが、岩城之徳の論文になると、この写真からの印象が拡大され、(小倉時代の森鷗外の事跡を調査しその宣揚に半生をかけた)という具合に、耕作の人生そのものが劇化されることになる。ともあれ、「田上耕作」という名前を「たがみ」ではなく、「たのうえ」であることが確認されたのは、森田雅子によつて耕作の旧友阿南哲郎および、耕作の甥にあたる福井恭一氏(現・北九州市門司区小児科医師)との接触が可能となつたためである。この福井氏の母親が先に述べた戦時中耕作を引きとつた伯母にあたり、筆者が伝聞として伝えた伯母の嫌悪というのも、平成十二年八月福井氏から直接うかがつた直話によるものである。

森田雅子の探索は、付隨的に清張が田上耕作という人物について取材をしていた事實を浮かび上がらせた。森田は書いていないが、清張が「三田文学」誌上における初稿「或る『小倉日記』伝」において、実名でなく上田啓作という仮名を用いたのは、おおむね「そつとしておいてほしい」という耕作の身の回りにいた人物たちへの配慮からくるやむを得ない仕儀であった、と考えられる。

森田がもたらしたもう一つ重要な事実に、耕作の生年の問題がある。森田の調査によれば、耕作が生まれたのは明治三十三年四月二十三日、死亡は昭和二十年六月二十九日の旧門司市を襲った空襲による。享年四十四才だった。このとき耕作は、母友とともに死んでいた。

る。ただし、二人は同じ場所で亡くなつたというのではない。空襲の最中別々に逃げまわり、耕作の死亡はその遺体も発見できないままの、死亡確認だつたらしい。これらの事実は、森田が雑誌「文芸三島」にまとめた「松本清張と田上耕作「或る『小倉日記』伝」の背景」（平成元年十二月八日、三島市教育委員会、73ページ）という論文に詳しい。森田は先の伝記調査を更に進めて、田上耕作伝としては、「或る『小倉日記』伝」を、はるかに超える詳細なものを書き上げた。耕作個人を



田上耕作（左）と母・友（右） 福井恭一氏蔵

語る資料として、おそらくこれ以上のものはないだろう。これにより、例えば耕作が二十才の春に、豊國中学校の人々の厚意で、無事に中学校課程を修了したことや、母友の父親の本名や、耕作の父親である真素雄が田上家の婿養子であつたことなどが確認できるのである。ここにはまた、先の写真とは異なる、正面姿の耕作の写真とともに、母友の写真も掲載されているのである。

ところで、森田がなした業績は、例えば次のように援用される場合が多い。

それから「田上耕作」は本当は明治三十三年生まれなのに、小説では明治四十三年生まれとしてあります。「三田文学」版では明治四十三年ですが、改稿後の本文では明治四十二年生まれになっています。松本清張自身、明治四十二年生まれなので自分と同じにしてるんですね。不遇なヒーローに

自分を投影させようとしていたんだろう、という感じが確かにわかるわけです。

これは「三田文学」（二〇〇〇年八月一日、三田文学会）が特集した「三田文学名選」をめぐる特別座談会における、武藤康史の報告（84ページ）だが、耕作の生年の意図的とも言える書き換えが、清張自身による自己同化の表れと解釈される好例でもある。そこにはやはり〈不遇なヒーロー〉という、これよりのうちに書かれることになる清張初期モデル小説の、一連のヒーロー像と相通じるような用語が用意されている。またここで武藤が参照したという、山崎一穎の「或る『小倉日記』伝論——事実と虚構の交叉——」（『鷗外』60号、平成九年一月十九日、森鷗外記念会）でも、〈小説中の田上耕作像は清張その人につづけている。明よりも暗に、光よりも影に焦点を絞つて造型していく清張文学の原点がここにある〉（57ページ）との指摘がある。森田が掘り起こした田上耕作の実像は、清張の創作意識の片隅にあつた、こういった意識を拡大し

て、我々の前に見せるようになつたとひとまず言えるだろう。

もう一つ田上耕作の死をめぐることで、清張が意図的に事実と書き換えたことがある。それは、耕作の死の様子である。先にも述べたように、耕作の死は、昭和二十年六月二十九日に門司港を襲つた、空襲によるものだつた。そしてそのとき、母友も同時に亡くなる。「或る『小倉日記』伝」に描かれた死の床で伝便の鈴を聞きながら、友人と母親に看取られて死んでいくという姿は、まったくそこにあり得るはずもなかつた。耕作の悲劇性を、大佛の言う読者の舌の上にくつきりと後味として残すような演出法であるが、回復の見込みのない耕作の肉体を「戦後」のときにまで引きずつてこなければならなかつたのは、先の山崎一穎の指摘を待つまでもなく、昭和二十六年五月に発表された「小倉日記」の出現と近接させるためでもあつた。ここには小説中に仕掛けられた「記憶」をめぐる主人公の意識と、いわば大衆小説的次元から教示された物語の余韻としての「詩」のあり方、そして記録体としての事実の枠取りへの接合という三様のエлементの緊密な結合が果たされているのである。

これらを、清張にもたらしたものは何か。煎じ詰めれば、それは自分だけが「田上耕作」という人間の事実を知つており、そこから抽出される「悲劇」のあり様を仮構化することができるという、強い自信に満ちた思い込みであつたろう。

## 六、清張のした「取材」とは？

鷗外の「小倉日記」を載せた戦後の鷗外全集（岩波書店）の刊行は昭和二十六年七月から始まるが、その第二十五巻月報25（昭和二十八年六月）に清張は

「私註『小倉日記』抄」という一文を載せている。ちなみにこの回の鷗外全集の目玉はやはりこの幻の「小倉日記」の発見だったようで、「小倉日記」関係の月報がいくつか並んでいるが<sup>(2)</sup>、清張のものもそうした流行の一つとなつてゐる。清張はここで二人の人物から取材したこと話を語つてゐる。一人は鷗外の聟原にしていた三樹亭の姉妹の妹にあたる「徳さん」である。そこでは「先生は副官をつれてよく見えた、酒はあまり召上がらなかつたという以外何の話もきけなかつた」と清張は率直に語つてゐる。

もう一人は麻生作男である。そこでニュアンスは多少微妙で、〈…とは當時先生と親しかつた麻生作男翁の話である〉と、自分が直接会つて言葉を交わしたとは書いていない。わずかに「翁」という言いまわしに、おそらく直接面会をしたであろう年下の人間としての敬意というものが、わずかに読み取れる程度である。

麻生作男は、鷗外の小倉在住のとき、福岡日々新聞の小倉支局長をしていた人物で、鷗外に大変可愛がられた思い出を、清張の月報に先立つ昭和二十七年一月の、月報8（第三十巻）に書いてある。先の三樹亭姉妹のエピソードもここに出ていた。従つて清張が先に引いた部分も、一般の当時の鷗外全集を繙いた読者たちと、同じレベルのものと考えられてよい。

しかし、それは、おそらく異なつてゐる。麻生作男の一文が月報に掲載された昭和二十七年一月から、「或る『小倉日記』伝」が書かれた同年八月上旬ぐらいいまでの間に、清張は麻生作男に少なくとも一回は会つてゐた。具体的に言えば、それは昭和二十七年の春、ということになる。

どうしてそれが確認できるかというと、清張自身が昭和二十七年九月七日づけ「朝日新聞」（西部本社版）の囲み記事「学芸」の「小倉時代の鷗外」の中



されたためだろうか。この事実も驚くべきことだが、清張はこの「小倉時代の鷗外を知っている唯一の生存者」とされる人物に、直接柳川の地で会っていたのである。新聞記事のその件りを引用する。

鷗外は「我をして九州の富人たらしめば」

「小倉安国寺の記」「和氣

清麻呂と足立山と」等の小文を土地の新聞に発表した。当時の福岡日日新聞の小倉支局長で麻生作男という男が鷗外の家に出入りしていてこれらの原稿をもらった。麻生は現在も健在で八十五歳の老体を筑後柳川で養つて

いる。今春筆者は柳川に麻生老をたずねて鷗外の思い出話をきいた。おそらく小倉時代の鷗外を知っている唯一の生存者であろう。

このことは、何を意味するのか。

現在柳川にある天叟寺の住職である吉富玄成氏は、松本清張が麻生を訪ねてきただきの様子をはつきりと記憶しており、筆者にそのことを話してくれた。清張はたしかに柳川に麻生作男を訪ねていたのだ。<sup>④</sup>

柳川という、取材の現場となる地を訪れたことによって、彼の内部で、田上耕作と母ふじとが途方に暮れつつ、二十四もある柳川の寺々を歩きまわるという作品のヤマ場が生き生きと結晶化されたのは間違いないだろう。実際の田上耕作は、柳川には行っていない。麻生作男が柳川の天叟寺に夫人や娘とともに身を寄せるのは、戦後の引き上げのときからであって、耕作が存命のとき、中國大陸に行っていた麻生作男と接触を持つことは、およそ不可能であるためである。

清張は、こうして「取材」した事柄を、「或る『小倉日記』伝」の中に使い切った。それは、おそらくこの「取材」と同じような労力をかけない者への、

復讐を孕んだような気持ちに近いものではなかつたか。そこには決して、不遇の人物への共感などという生やさしいものではない、もっと眞懲にも近いものが感じられる。あるいは、それはのちに彼が数多く描くことになる、犯罪者の現場での心理に近い。作品末尾の耕作の安らかな死とは、そうしたものへの救済として、何より清張自身に必要とされたものではなかつただろうか。ちなみに初稿では「麻生咲男」の変名を用いていたものも、改稿版では「麻生作男」と実名に改められていく。

松本清張という、いまだどのような才能を内に秘めているか見当のつかない一人の男は、こうして小説を書いた者から小説を書ける者へと自らを変貌させていった。ことの経緯を順番に示せば、鷗外時代の生き残りである麻生の存在を全集の月報で知り、昭和二十七年の春に取材、七月九日に松本清張と署名のある「学芸」記事を発表、そして、八月二十五日印刷の奥づけのある「三田文学」に間に合うように入稿、それと同時にすぐに不満を覚えて、書き直した第二稿現行版を送つたが、「三田文学」誌上には間に合わず、芥川賞決定後の昭和二十八年「文藝春秋」三月号にこの作品は載つた。清張が「田上耕作」を「田上耕作」として曖昧な読みのまま放置したのは、「取材」から得た事実を開示しながらも、事実としての田上耕作を超える範囲を作り出すという自身が新たに会得した両義性のある方法に対する、自らの証しと戒めのような意味がこめられたのでなかつただろうか。「田上耕作」が「たのうえこうさく」でもあり、「たがみこうさく」でもあることに、清張はあくまで自覺的であったし、またそうしておかなければならぬ必要性を、だれよりも深く感じていたものと思われる。

注

平成十二年十月、東京池袋にて取材。

② ちなみに第一回の記録文学（昭和24年8月14日）は、特選という階位はなく、入選作二つが同時に掲載されている。

③ 〈入選の六篇は、現代小説、時代小説、ユーモア小説各二篇となっているが、これは単なる偶然であり、編集部が最初から意図してこのような選をしたわけではない〉とある。

④ 「別冊文藝春秋」（平成10年10月1日）の「松本清張の昭和三十年代」という対談の中で、川本三郎は〈だて、『黒い画集』と吉川英治の『新平家物語』が始まった頃の『週刊朝日』は百万部出てたんですから。毎週校了が終わると、ハイヤーなんか仕立てで箱根に行って、どんちゃん騒ぎしてたつていう伝説が残っている〉と、当時のブームの様子を伝えている。

⑤ ちなみに源氏鶏太はこのとき発表した「英語屋さん」で、第25回直木賞を受賞する。

⑥ 「菊池寛から松本清張へ——「西郷札」の成立」（第一回松本清張研究奨励事業研究報告） 平成十二年八月四日 北九州市立松本清張記念館 13ページ

⑦ 「文壇榮華物語——中間小説とその時代」（一九九八年十一月五日 筑摩書房） 260ページ

⑧ 先の「西郷札」の中での「明治編年史」を仕事の合間に新聞社の資料室で立ち読みし、メモをとったと語っている。

⑨ 「或る『小倉日記』伝」における「三田文学」九月号（昭和二十七年九月一日）から「文藝春秋」三月号（昭和二十八年三月一日）への改稿の過程について、清張自身「雑草の実」（『読売新聞夕刊』昭和51年7月7日）といふ小文の中で触れている。

⑩ 筆者は森田雅子の取材を一つだけ越える取材を行った。それは田上耕作の友人だった延本一雄の長男延本実行氏にお話をうかがったことだ。延本実行氏は小倉の妙法寺の住職である。戦前、耕作から彼の鷗外の研究の引き継ぎをほのめかされたが、断つたという。耕作のノートは現在伝わらないが、実行氏が垣間見たものは、ノートとしても混乱を來した、整理のつかないものであったという。清張が延本一雄にコンタクトをとつていたことについては、松本清張記念館発行の図録「清張と鷗外 鷗外のまなざし、響きあうもの」（一九九九年六月十九日）の小林安司・今村元市の対談「清張と鷗外とそして田上耕作のことなど」に詳しい。実行氏は田上耕作の事蹟についてむし

るそつとしておいてほしかつたところ返していた。平成十二年八月、小倉

妙法寺にて取材。

⑪ 「記憶」、「或る『小倉日記』伝」、そして「顔」には、主人公の「記憶」というものへの発見の過程が描かれている。この点に関して、更に詳細な考察

を進める予定でいる。

⑫ 代表的なものは、月報18（第三十一巻）に見られる岡崎義恵の「十人の婢」などであろう。

⑬ 記事は五段組のカット入りで、中央に題名と「松本清張」という署名がある。記者としての説明はなく、本文末尾に（作家）とある。取り扱いとしては、決して小さなものではない。「学芸」は定期的な欄でもある。

⑭ ちなみに麻生の一家はこの寺に眠っており、住職の言によれば、その血筋は絶えたとのことである。平成十二年八月、柳川市天叟寺にて取材。

（やまぐち まさゆき・専修大学助教授）

（松本清張）の研究を奨励するため、北九州市立松本清張記念館にて、松本清張研究奨励事業研究報告書を発行する。この報告書は、松本清張の研究を奨励するための活動の実績と、その効果についての報告である。

平成十三年十月十日発行

## 第二回松本清張研究奨励事業研究報告書

編集・発行 北九州市立松本清張記念館

北九州市小倉北区城内二番三号

電話 ○九三一五八二一一二七六一

印刷・製本 榊ゼンリンプリントックス

# 松本清張研究奨励事業

第4回

## 募集要項

### 一、趣旨

時代を見つめ続けた松本清張の文学を研究することは、今後の時代の進むべき方向性と私たちの生きていく指針を見出すことにもつながります。このような視点から、清張の作品や人物像についての研究活動を推進し、歴史や社会の事象の深層を追求する精神を継承していくため、松本清張夫人ナヲ様のご厚意により創設しました。

### 二、対象

ジャンルを問わず、松本清張の作品や人物像を研究する活動や、松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動（調査、研究等）でこれから行おうとするもの。年齢、性別、国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人または団体也可。

### 三、内容

入選者（団体）に二〇〇万円を上限とする研究奨励金を支給します。金額は企画内容を検討して決定します。

### 四、応募規定

今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容がわかる企画書、予算書など（様式は自由、ただし日本語）を、平成十四年三月三十一日までに応募してください。

### 五、選考

松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

### 六、発表

審査終了後、審査結果を直接通知します（六月末頃）。なお、入選者には開館記念日（八月四日）に、北九州市で贈呈式を行います。

### 七、その他

採用された企画は翌年の六月末日までに実施成果を報告していただきます。また、成果品である研究論文、報告書等は記念館が刊行予定の研究誌に掲載することがあります。成果品にかかる著作権等諸権利は、北九州市に帰属します。

### 八、応募先

〒八〇三一〇八一三 北九州市小倉北区城内二番三号  
TEL〇九三（五八二）二七六一 FAX〇九三（五八二）二三〇三